

広島俳句倶楽部

令和二年十一月作品集

秋を迎える京の山裾 村上正人

まだ私が会社員だった頃、ひとまわり以上歳の離れた先輩と京都を歩いた。先輩が東京に赴任した頃は、しまり、入れ替わりで私が東京に赴任した間もずつと続いた。年に四回、京都駅で待ち合わせ、ホットドックを齧りながら行き先を決め、リムックを背に京の道を歩いた。やがて私が郷里の広島に戻ることになり、京都の観光客も増加が甚だしくなつた頃、この楽しみは自然消滅した。

この秋、久しぶりに京都を訪れたところ、心に残っていた山裾の風景が昔と変わらぬ落ち着きを取り戻っていて、感慨深いものがあつた。

鯖の道滴る山に入りにつけり

霧晴れて木々の香れる山の道

比叡山下れば懸巢鳴きにけり

爽籟や山門に見る京の町

花野抜け名古屋の滝の跡に着く

広沢の池へ穂薄傾ぎたる

格子窓越しに見てゐる秋時雨

十六夜月京の甍を照らしたる

鹿威しの音のしてゐる東山

山粧ひ水琴窟を聞いてをり

山毛櫨に日の差しては秋の深まりぬ

秋蟬や松はあまねく日のあたり

弥山よく見ゆる日の鴨飛びにけり

蓮の実に夜の深まつてゆくばかり

小望月さへぎるものなき御空

木犀の垣根に沿へば風の吹き

桜の実に向うの坂を下りけり

一軒の家見て下る秋の山

奥日野の刈田に雨後の日差かな

茶の花にまた一人来て静かなり

泡立草線路に沿うて揺れてをり

終電に人を見送り良夜かな

秋の蚊の羽音近くに聞こえたり

秋の夕高き梢に鳥のゐて

墜ちさうにしてさらに飛ぶ白鷺鴒

濠深く沈んでゆける鱸かな

乗船の始まるフェリー―秋時雨

大川の漣分けて鴨泳ぐ

大寺の庭に匂へる数松葉

反橋に人すれ違ひ石路の花

秋の風川面に天守映りたる

白萩は吾の方へとこだるるか

望月に雲一片のなかりけり

かはどまで細き月かな山に入る

朝寒を一人一人の走りゆく

逆上がりする子らと見る紅葉かな

朝まだき公孫樹落葉を踏んでゆく

花の香のどこからかする秋しぐれ

茶の花の一つ二つと咲き始む

昼休み人それぞれの小春かな

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

初しぐれ手櫛をしつ少女来る
朝しぐれ二人の子ども駆けてゆく
法話聴き時雨の道を帰りけり
石路の花雨にしてゐる人の声
掃き癖の付きたる寺の簾かな
山茶花や兵たりし日の父の文
とろけそうなおでんの大根食べにけり
上空に爆音のして蓮根握る
牡丹鍋山家の夜の風の音
斧提げて男下り来る冬の山

あざみ

木々の間をくぐつてゆけり秋の蝶
新築のレストハウスや秋の雲
秋天や行列で待つ博物館
隣家の金木犀に立ち止まる
秋天へ玉入れの籠支へをり
少年の額のにきび青みかん
かくれんぼの声の聞こゆる柿日和
夫ひとり味噌汁啜る秋の夜
長き夜や広き背中に湿布貼る
リビングに燈火親しく暦貼る

亜矢

潮入へ寄するさざ波蕨の実
秋の空ゆつくりと舞ふ鶯一羽
川岸を覆つてゐたる葛の花
残る蚊の厨口よりついて来し
景隠れにくねりて落つる秋の滝
吊り橋を歩けば揺れて秋の昼
琴の音の庫裏に聞こゆる金木犀
檸檬黄葉きりきり舞うて散りにけり
散紅葉分けつ鯉の泳ぎをり
鶯と鶉と砂洲に佇む小六月

敬子

山住みにはや秋の灯の点りけり
ひよどりの声遠のきて里暮るる

大豆引く沖の荒れたる一日かな

初時雨過ぎて木の瘤見てゐたり

冬紅葉堰越ゆる時早きかな

冬草の崖をよぎりて獣道

糠雨の中の目差しや花八つ手

山茶花の垣根伝ひに宮参り

霜月の社の鈴を鳴らしけり

冬の暮掻いては焼べる畑のもの

曉子

家に来し精霊ばつた放したる

母と子の二階から見ると今日の月

石垣に母の見てゐて大根蒔く

工場のフウの並木の紅葉して

三日目に松の手入の終りたる

秋晴の祖父の植ゑたる杉木立

富有柿竿で抱いては籠に入れ

秋日和あかんぼ口で乳さがす

松茸が祖父の炭焼跡に出て

秋祭父は幟を立てにけり

ちどり

どんぐりの大き目ひとつ拾ひたる

祈る子に色なき風の吹きにけり

玄関を出れば木犀香りけり

坂道に転がるひよんの実を運びぬ

筆一字一字に釣瓶落としかな

手のひらにずつしりと乗る熟柿かな

珊瑚樹の実を食む鳥の尾の見ゆる

降りしきる雨に散りたる紅葉かな

故郷の方を見てゐる時雨かな

爪切ればちゃんと跳ねて日向ぼこ

松本恵和

鰯雲しだいに崩れ朝日差す

水引の花川風に揺れてをり

吾亦紅母が好んで入れにけり

コスモスへ乳母車の子手を伸ばす

アルバムを開き見てゐる月今宵

月の夜の川向うより広がりぬ

秋の朝大川渡る鳥の群

日溜りの石に来てゐる秋の蝶

大海を賑やかに行く渡り鳥

秋天に飛行機雲の筋二本

美耶

ふるさとの山を跨いで二重虹

高々と稲架の組まれし能登郡

木犀や杖を手に訪ふ興福寺

頂上に赤き鉄塔秋の山

酔芙蓉友は少なくなりけり

宮島に差し潮しづく良夜かな

夜更しのひとり愛てゐる今日の月

菩提寺の裏は小暗し帰り花

古稀の友誘うて食ぶる牡蠣ご飯

阿姫

急坂は鳥居へつぎ秋の山

街並を見下ろしてをり秋の山

月差して赤き煉瓦の古きカフェ

目の前を船の通りて月の瀬戸

瀬戸内の鯛で新酒を酌み交す

秋の海近く見てゐる古稀の朝

注連縄の町屋に揺れて秋祭

川縁に咲いて白花曼珠沙華

芝居観てそぞろに歩く十三夜

井藤希

山かげのやうやう明けて螢草

竜胆やカルスト台地に日の差して

高原の草と見紛ふちちろ虫

草の穂や川の向うに村の跡

並びたる稲架へと延びる山の影

杖を置き一枚拾ふ紅葉かな

団栗の吹き寄せられし遊具下

音立てて枝を離るる木の景かな

暮早し大鳥居見ず友帰る

栄吉

青空や軒に五つの柿吊るす

飴色に小さくなりて吊し柿

真つ先に櫨の色づく紅葉かな

夫の忌の水汲みに出て月仰ぐ

月明の路地に靴音響きをり

秋の日のものの乾ける音のして

ながながと貨物列車が冬野ゆく

大小の落葉ベンチの夫に見せ

街路樹のつぎつぎと散り冬重

大橋博子

鏡見て母に似てきて吾亦紅

猫の居る路地におしろい匂ひけり

木犀の香のなかを来る雀かな

狛犬に金木犀の降りしきる

波の音電話に聞こゆ秋の湖

子の髪を梳かしてゐたる良夜かな

川の水まんまんとして夕月夜

公孫樹の実踏んで公園通り抜け

大菊の莖づけば崩れ始めをり

桑門わかこ

六七度汽水を打つて海鷗突つ

上下に流るる雲や秋の空

ちりとりにきらめく冬の割れガラス

ここからは川ゆつたりと蘆の花

貰ひたる松茸一本飯を炊く

陸橋を抜ける鋼鉄冬の道

髪刈りて個展に臨む菊日和

山道に実を垂らしたるななかまど

散紅葉庭師の銀の音続く

絵に当てるスポットライト蜻蛉くる

公孫樹散りのんびり歩く日曜日

冬めくやガラスコップの水平線

嚴島影を落として秋の朝

石積の途切れしところ石路の花

干潮の鹿と等しく小春かな

赤んぼの声掛けられて秋日和

山茶花のつばみ散らむ昼の月

銀杏紅葉小さきロープウエー飛ぶ

細道の秋吉台の薄原

庭の隅咲きし山茶花散りはじむ

賑わいのフエリー手を振る神の旅

破蓮の乾いた風に揺れてをり

大根を染みこむほどに煮る夕餉

街路樹が一度に放つ木の景雨

鰯を汁と煮物に加賀の宿

届きたる新海苔の封切りにけり

修復の建屋乾いて神意月

新庄憲彦

友岡崇山子

ふじ女

木犀の香り車中に入り来たる

石段の一段づつを木の実打つ

十三夜いつもの道を通りけり

長き夜の新刊の帯外したる

五箇山へいくつも越ゆる紅葉山

夫とゆく夜寒の外湯めぐりかな

山茶花にふれながら行く外湯かな

山茶花に立ち止まる人過ぎる人

落葉して海側の道歩きけり

松田裕子

筆立に芒二本を挿しにけり

ひとしきり路地の風吹く鳳仙花

青空の下の下校や稲の秋

秋耕のけむり流るる日曜日

満ち潮に舳先の揺れて葦の花

仕舞湯に新湯加ふる秋気かな

朝まだき投網打ちをる霧の中

残照の家路を急ぎ秋薊

風すこし強くなりたる破蓮

森口良樹

山百合の楚々と咲きけり庭の隅

漬物に使ひ切つたる鷹の爪

子に宛てて新米と書く送り状

沢庵の重石の石を洗ひけり

鍋鶴の戻り来て舞ふ村の空

冬薔薇堀の向うに咲きにけり

山間の向かひの空の冬銀河

白壁に濃き影を成し枯木立

英一

新涼や大師歩みし高野山

秋高し熊野古道の家族連れ

爽やかに鳥の声する朝ぼらけ

鰯雲ひとりて住める翁かな

満月の帰りの道を照らしをり

風に乗る金木犀の香りかな

木犀の香に若き日を思ひ出し

菊の花咲いたと姉の便りあり

大畑恵

月の夜の御香の席の余韻かな

いつまでも眺めてゐるたる月夜かな

枯菊を刈り残したる畑かな

霜除をすませ安堵の夕べかな

部屋に居て動くものなき霜夜かな

真つ白に輝いてをり霜の朝

冬帽子深くかぶりて町へ出る

紀英子

縁側の灯りの如し吊し柿

通るたび確かめてゆく吊し柿

みちのくの旅の夕餉の芋煮かな

居酒屋の皿に盛られし衣被

老松をしかと覆ひて蔭紅葉

朝の道秋明菊の散つてをり

冬北斗計報に思ふあの笑顔

宮田保江

からたちの実や若き日の下校道

秋深むことより始め便り書く

椿の実にぎれば温き掌

破蓮へ風に乗つたる波の音

回天の島に風吹きにけり

我が路地の隅々照らす冬の月

白神陽子

手土産の坊ちやん団子食ふ夜長

初冬の深夜の街を猫走る

舗装路に雀の跳ねて冬の朝

兼題を考へ冬の喫茶店

甲板を降りては上り冬の旅

清水弘通

高速を降りれば見えて木守柿

山の霧古き社を覆ひたる

柚子の香に癒されてをり仕舞風呂

遠藤さつき

手土産を届けし夜の初時雨

山茶花の一輪の咲き奥の院

電線にふくら雀の止まりをり

上島康子

住み慣れた家を見てをり秋日濃し

口笛が聞こえてきたる秋夕焼

ゆで卵つるりと剥いて秋の暮

熊谷ゆり子

後の月空の深くに懸かりたる

朝霧の濃き国道を走りけり

山茶花の団地の道に咲き満ちて

民

夕暮の灯を点したる石路の花

山茶花の園児の列に散りにけり

コナ祠の本屋に入り日記買ふ

ちかこ

大空に近き方より公孫樹散る

中庭のところどころに石路の花

薄桃の山茶花咲ける古屋かな

撫子

天と地を染めたる公孫樹黄葉かな

日の差してなほ鮮やかに楡紅葉

草熟いつの間にやらしかと付き

穂高

ぼつぼつと上へと咲いて水引草

板塀へ続く山茶花咲き始む

山茶花の垣根の下に猫のゐて

みさ子

十三夜帰省してゆく子らの声

山茶花の白の散つては重なりぬ

背中にもくっ付いてをりゐのこづち

やす保

冬の町行くあてもない迷い人

シクラメン我が人生も白きかな

阿波久

いつせいに 出て 間引くなり 水菜の芽

山茶花の咲いては 散れる 日々となる

かこ

山茶花の 次々に 咲き すぐに 散り

この 香り 花 枝と 気付きたる

津田 玲子

秋 日 和 ハンド クリーム 並びたる

宮 島 の 鹿 の 引きたる 紙 袋

山崎 桂子